

タイトル	解放後朝鮮のイデオロギー形成
著者	水野, 邦彦; MIZUNO, Kunihiko
引用	季刊北海学園大学経済論集, 62(4): 137-149
発行日	2015-03-31

《論説》

解放後朝鮮のイデオロギー形成

水 野 邦 彦

1945年8月15日、日本の植民地支配を受けていた朝鮮は、解放された。解放はとうぜん全朝鮮民族の主権国家設立につながるはずであったが、それはかなわなかった。一口でいえば、つくるべき国家のありかたをめぐる朝鮮人どうしで鋭い対立が生じたのであるが、この対立は純粹に朝鮮人どうしの対立であったのではなく、背後に社会主義国・ソ連の存在と資本主義国・米国の存在とがあった。

朝鮮が解放された日に朝鮮建国準備委員会が組織され、いったん朝鮮人民共和国樹立が宣言されるが、それを前後してソ連軍と米軍が朝鮮に上陸した。米国は朝鮮人民共和国を否認し、南半部では米国による軍政がしかれた。爾後の南半部では、米軍政の庇護のもとで親米国家をつくろうとする右派と、社会主義にもとづく反米国家をつくろうとする左派とが、熾烈な闘争を長期間つづけることになる。

解放後に左右の政治的立場によって振りまわされる朝鮮人民は、いかなる態度をとり、いかなるイデオロギーを内面化したのかを、南半部=韓国の社会にそくして把握したい。

I 朝鮮の解放空間

1945年の朝鮮解放から、1948年の大韓民国建国・朝鮮民主主義人民共和国建国までの経緯は、解放三年史といわれる。解放三年史はある種の解放空間であったが、この解放空間という言葉には少なくとも2つの意味がふくまれているという。すなわち「第一に、日帝の植民統治機構がとつぜん崩壊し、なんらあらたな権力の中心や統治形態があらわれない一種の力の空白という客観的条件を指す。第二に、韓国社会のさまざまな力や勢力が競い合い、おのずからなんらかの秩序を形成しうるきわめて肯定的で積極的な意味での〈可能性の政治領域〉をさす。いいかえれば、わが民族が自律的にあらたな秩序をつくりだしうる空間ができたということである」⁽¹⁾。解放空間は大規模な政治的出来事がいくつも起こりうる空間であったが、間断なく発生する政治的出来事のゆえに、解放空間は朝鮮民族に統一国家指向の民族主義のありかたを「反省する契機をあたえず」、過去の朝鮮民族のありかたや民族主義のありかたを「清算しないまま分断と冷戦体制が南北朝鮮それぞれの社会構造を特定してゆくしかなかった」という結果を招くことになる⁽²⁾。

*印は日本で発行された文献である。

(1) 崔章集『民主化以後の民主主義』ふまにたす、2002年、41頁。

(2) 曹喜暉『韓国の国家・民主主義・政治変動』當代、1998年、87頁をみよ。

1946年10月には大邱をはじめ各地でゼネストが組織され、これに参加した人々は全体で約100万にのぼり、約2000人の死者を出したという。このときの一連の運動は、十月人民抗争とよばれる。十月人民抗争は、たんなる暴動ではなく、丁海龜の精緻な研究によれば、日本植民地下の社会構造・政治構造が解放とともに改められねばならなかったにもかかわらず、そのまま維持され、再建されたことにたいする抗争であった。それは米軍政にたいする抵抗、保守的・反動的勢力にたいする抵抗であり、この抵抗の主体は変革勢力の中央指導部ではなく、地方の献身的な左翼と民衆であった。一口でいえば、十月人民抗争は変革を指向する“民衆”ないし“人民”の抗争だったのである⁽³⁾。

米国の意向を受けて南半部だけで政府を組織するための総選挙が1948年5月におこなわれることになり、選挙に批判的な風潮の強い済州島では朝鮮本土からやってきた西北青年団や警察が島民を暴力で押さえつけて投票所に向かわせようとしたが、それに抵抗する島民が山にこもり、4月3日未明に武装蜂起して反撃に出た。これは四・三蜂起とよばれるが、警察らは蜂起した武装住民やその家族らにたいする過剰なまでの鎮圧を加え、さらには武装住民の出身集落を焦土化する暴挙をくりかえし、四・三蜂起は「四・三事件」になった。6年あまりつづいた四・三事件がたんに事件の発生から終熄までをもって説明がつくさるものではなく、植民地時代の朝鮮に起因する社会的背景を有することは、「済民日報」四・三取材班『済州島四・三事件』、文京洙『済州島四・三事件』などの専門書のほかに、たとえば金石範『火山島』に仔細に描かれているし、また、この小説を歴史的事実と照合しつつ仔細に分析した中村福治『金石範と「火山島」』という畢生の力作によって私たちは朝鮮解放三年史と済州島四・三事件とを有機的総合的に把握することができる⁽⁴⁾。2万5000人～3万人の死者を生んだこの四・三事件はいまだ終結した事件ではなく、事件そのものの真相究明は大幅に遅れ、ようやく金大中政権下で制作がすすんだ『済州4・3事件真相調査報告書』が韓国で2003年に刊行されたにすぎない⁽⁵⁾。

四・三蜂起鎮圧のために朝鮮本土から済州島に向かう軍隊に所属していた軍人の一団が港町・麗水と順天で叛乱を起こし、この麗水順天叛乱で約1万人の死者が出た。十月人民抗争、済州島四・三事件、麗水順天叛乱だけで数万人の人々が殺されたのであり、「これが米軍政三年間の業績だ。その屍の上に李承晩政権が作られた」⁽⁶⁾といわれるのも大げさではないだろう。大韓民国とは「アメリカの強権によって人民の犠牲の血の上に作られた虚構の国」⁽⁷⁾であるという把握にも相応の根拠がある。

麗水順天の叛乱軍人たちの一部は智異山中にかくれて韓国政府に抵抗するパルチザンとなった。パルチザンたちが社会主義を奉じてのちの朝鮮戦争において韓国軍（連合軍）と対峙したことは、小説『太白山脈』にくわしい⁽⁸⁾。

(3) 丁海龜『10月人民抗争研究』よるむ社、1988年、202-204頁をみよ。

(4) *「済民日報」四・三取材班『済州島四・三事件』全6巻、新幹社、1994-98年、*文京洙『済州島四・三事件』平凡社、2008年、*金石範『火山島』全7巻、文藝春秋、1983-1997年、*中村福治『金石範と「火山島」』同時代社、2001年。

(5) 済州4・3事件真相糾明および犠牲者名誉恢復委員会編『済州4・3事件真相調査報告書』図書出版 先人、2003年。ほかに同委員会の編輯による『済州4・3事件資料集』全11冊、図書出版 先人、2001-2003年、も制作された。

(6) *趙廷來／尹學準監修『太白山脈』第V巻、ホーム社、2000年、390頁。

(7) *金石範『火山島』第V巻、1996年、340頁。

(8) *趙廷來／尹學準監修『太白山脈』全10巻、ホーム社、1999-2000年。

朝鮮戦争の過程で、韓国軍（連合軍）が居昌という山間の小さな集落の住民719人を集団殺害した居昌良民虐殺事件が起こったことは、後年まで知られぬまま年月が過ぎたが、今日では小説『冬の谷間』⁽⁹⁾によって知ることができる。忠清北道永同での米軍による良民虐殺、高陽市金井窟での良民虐殺も、同類の集団殺害事件である⁽¹⁰⁾。

なお歴史の記述、歴史の復元、歴史の再把握、そして歴史の追体験において、小説あるいは文学作品の意義は思いのほか大きい。身をもって歴史的出来事を感じしうるのは当時それを体験した人々にかぎられるが、爾余の人々は文学作品をつうじて歴史的出来事を追体験しう。実感をもって読者を追体験にみちびく点で、いわゆる歴史書以上に文学作品の果たす役割は大きい。たとえば大西巨人『神聖喜劇』によって軍隊生活を、帚木蓬生『三たびの海峡』によって朝鮮人炭鉱労働を、林洛平『光州 五月の記憶』によって光州民衆抗争を、私たちは多少とも追体験しう。追体験のみならず、これらの作品によって私たちはしばしば歴史の通説から距離をとり、歴史記述修正の必要を痛感する。歴史の通説はおおむね社会の権力者によって流布されるものであるが、それが民衆の立場でくつがえされるべきことを、これらの作品は示唆している。権力者が民衆にたいして起こした事件を素材に作家が小説作品を構成することは、歪曲された公式記憶を否認し、民衆の壊れた集団記憶を復元してゆく意味がある⁽¹¹⁾。

また小説が、人間の全体や人間の存在を、哲学のように思惟によってでなく「感性的な想像力を通して」とらえるものであり、「そこには個人のなかにある〈世界全体〉が入りこまないといけない」ことを、くだんの『火山島』の作者・金石範は語っている⁽¹²⁾。おのおのの歴史的出来事は特定の側面でのみ起こるのでなく、人々はそれを自分の特定の側面でのみ体験するのではない。当の歴史的出来事によって自分の生の全体、自分の意識の全体が大きく左右されるのである。それだからこそ歴史的出来事は、たんなる外的な出来事として語られればよいのではなく、人間の社会意識・イデオロギーと分かちがたく結びついて語られるのである。

II イデオロギー形成の外的条件

解放後朝鮮では政治的社会的に尖鋭な対立とすさまじい闘争がくりひろげられたが、それらは物理的な対立と闘争であるにとどまらず、人々の社会意識——ものの見方、ものの考えかた、人と人との関係——を左右した。すなわち、対立と闘争はイデオロギーとして朝鮮半島の人々の社会意識を方向づけたのである。

イデオロギーは観念形態と訳されることがあるが、正確には「観念を構造化する形態」というべきである。それはなんらかの観念を構造化し「他の人間と共通した特定の思考形式」をつくり出すもので、枠もしくは型に近いものとみなしう⁽¹³⁾。観念を構造化するさいには一定の前提、一定の基盤が不可欠であり、その基盤が「土台 Basis」とよばれる。特定の必然的な、自分の意

(9) * 金源一／尹学準訳『冬の谷間』栄光教育文化研究所、1996年。

(10) * 金東椿／拙訳『近代のかけ』青木書店、2005年、53頁をみよ。

(11) * 玄基榮／村上尚子訳『忘却に抵抗する精神』『済州島四・三事件 記憶と真実』新幹社、2010年、33頁をみよ。

(12) * 金石範『金石範《火山島》小説世界を語る！』右文書院、2010年、234頁をみよ。

(13) 家族主義に象徴される朝鮮の因襲的価値意識が韓国の社会意識の枠をなしていることを思い起こしたい。

* 拙著『韓国社会意識粗描』花伝社、2002年、第1章をみよ。

志から切りはなされた人間の生産諸関係の総体が、社会の経済的構造を形成するのだが、この社会の経済的構造が現実的土台をなし、そのうえに一個の法律的政治的上部構造がそびえたち、それに特定の社会的意識諸形態が照応するのであり、物質的生活の生産様式が社会的・政治的・精神的生活過程一般を条件づけるのである⁽¹⁴⁾——というように社会科学的分析がなされる。いわば物質的生活が人間の精神や意識を規定するのであり、社会の現実的基礎のなかでイデオロギーが形成されるのであるが、「多くの場合、イデオロギーは自分の現実的基礎を見失い、『超階級的な永遠の真理』だと思ひ込むので、イデオロギーという言葉は、『自分の基礎を見失って一人歩きしている逆立ちした意識』という意味でも使われる」⁽¹⁵⁾。

「支配階級のイデオログたちは……みずからのイデオロギーがあらゆる社会的諸関係をつくりだす力でもあり、あらゆる社会的諸関係の目的でもあるとみなす」⁽¹⁶⁾のと同様に、イデオロギーは社会的諸関係から自立して社会的諸関係をつくりだすことがある。イデオロギーもしくは意識形態・観念形態・理念が現実の物質的生活をはなれて「自立化」するということは、両者の関係が転倒し、イデオロギーが現実の物質的生活を包括する、すなわちイデオロギーが現実の物質的生活を統合することを意味する。イデオロギーが「自分の基礎を見失って一人歩きしている逆立ちした意識」を指す場合が多いという上述の言葉は、このことを意味する。

イデオロギーは支配的思想・支配的關係と結びつくことが多く、その場合には本質的に社会的統合に与する。自立化と、現実の物質的生活を包括する社会的統合とは、イデオロギーの指標であり要であるといえる⁽¹⁷⁾。

こうして、観念を構造化する形態として他の人間と共通した思考形式をつくりだすイデオロギーは、みずからを永遠の真理だと思ひこんで現実の物質的生活を統禦し、支配に加担したり抵抗を組織したりするにいたる。それどころか「いかなる理論も大衆的イデオロギーに翻案されなにかぎり物質的力と社会的運動になりえない」⁽¹⁸⁾とさえいえる。

解放後朝鮮のなかで対立と闘争を背景とするイデオロギーがいかに形成されたのか。まずはイデオロギー形成の外枠というべき外的条件を概観しよう。

前節に示した社会状況は、戦後冷戦体制もしくは米ソ対立のもとで現象した朝鮮半島の左右対立に起因し、それが朝鮮半島の南北分断によって緊張を高めたものといえる。当時の朝鮮の社会状況ないし社会の現実的基礎が人々の意識のなかに染みわたり内面化してゆくうえで、朝鮮に民族内の統合力量が缺けていたこと、冷戦の論理に対抗しうる民族内の根拠が崩壊していたことが大きく作用したと社会学者の曹喜暉は論ずる⁽¹⁹⁾。曹喜暉によれば、朝鮮には1945年までの植民地支配にたいする抵抗として形成された独立運動諸派があり、解放直後にも「分断の現実にたいする内部の抵抗の論理と勢力が存在した」が、この勢力は内的脆弱性と流動性をはらんでおり、民族内の統合が果たされなかった。これらの朝鮮内部の諸勢力は朝鮮戦争という尖鋭化した状況のなかで、北の政府の正統性をみとめ共産陣営に同調するのか、南の政府の正統性をみとめ自由陣営に同調するのか、という二者択一を迫られ、けっきょく朝鮮民族は冷戦体制編入に抵抗し切

(14) Vgl. K. Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie, *MEW*, Bd. 13, Berlin, 1961, S. 8f.

(15) *後藤道夫ほか『なぜ富と貧困は広がるのか』旬報社, 2008年, 65頁。

(16) K. Marx, F. Engels, Die deutsche Ideologie, *MEW*, Bd. 3, Berlin, 1958, S. 405.

(17) 以上, *渡辺憲正『イデオロギー論の再構築』青木書店, 2001年, 8-19頁, 89-100頁, 208頁をみよ。

(18) 孫浩哲『転換期の韓国政治』創作と批評社, 1993年, 27頁。

(19) 以下, 曹喜暉『韓国の国家・民主主義・政治変動』87-95頁をみよ。

れなかった。冷戦という外的体制は朝鮮諸社会勢力の政治的進退を決定する遠心力として作用し、この遠心力に対抗する求心力的統合軸が形成されなかったのである。

二者択一を迫られた様子は、朝鮮戦争を主題とした小説に描かれている。

この戦争は、イデオロギーが作用する同じ民族同士の戦いだし、まだ南北ともに、それぞれ外国の軍隊を引き入れている、言うならば国際戦争です。そのように複雑きわまりない様相を呈しているために、人々のものの考え方も錯綜しているのです。戦争とは敵味方に分かれて戦うもので、今度の場合もその色分けははっきりしていました。しかしながら……反民族勢力で構成されている李承晩政権などは絶対に容認できないが、だからといって共産主義を支持するわけにもいきません。そこで、そういう立場の人々をひとまとめにして政治的に中道派と呼んでいたんですが、結局のところ、どちらからも歓迎されませんでした。ところが今度の戦争で、そのような人たちのほとんどが、どちらかに加担せざるをえなくなり、戦争前に言われていた、あの中道派なるものは、もはや存在しないとんでも過言ではありません。⁽²⁰⁾

左右対立さらには南北分断は、外部の冷戦体制によって、いわば朝鮮民族自身の意思を越えたところで推進された。植民地支配下でとうぜん民族意識は昂まっていたが、1945年8月の解放を機にこの民族意識を束ねてあらたな国づくりに向かう間もなく、朝鮮半島は米軍とソ連軍とに圧迫されはじめた。そこに米国をめぐる誤まった状況認識があったことは否定できない。すなわち米国は、朝鮮の「民族自決を制約する条件」とはみなされず、「施惠的なものとしての8・15解放をもたらしてくれた解放者と受け入れられていた」し、さらに朝鮮戦争をへても「米国の援助は民族主義的な民衆の覚醒を遅らせ」る効果を発揮したのである⁽²¹⁾。朝鮮でのこのような錯覚は、金石範『火山島』にも描写されている。

しかし祖国に訪れた「解放」が、じつは幻影だと人々がさとるのに時間はかからなかった。カネのある者が物資を買占め、退蔵し、いわゆる謀利輩たちが米やその他の食糧を日本に密輸出するなど、物資は途端に欠乏しはじめた。そして、一夜明けて目が醒めてみれば……「解放者」であるはずのアメリカが、旧日本帝国の強力な後釜だったということだ。……こんどはアメリカが軍政を布いて、李承晩を自国から呼び入れ、八月十五日以後逃げ隠れていた日本帝国の協力者つまり「親日派」たち……の復活を徐々になし遂げたのである。……南朝鮮占領軍司令官ホッジ中将の「私が日本人の統治機構を利用しているのは、それが現在もっとも効果的な運営方法だからである」という言明どおり、こうして朝鮮総督府の機構をそのまま受け継ぐ形で軍政が行なわれ、「民族反逆者」の復権の舞台がひとまず提供されたのだった。⁽²²⁾

おなじく解放後朝鮮の左右対立をあつかった長編小説にも、つぎのような記述がみられる。

(20) * 趙廷來『太白山脈』第IX巻、2000年、203頁。

(21) 朴玄燾「分断時代韓国民族主義の課題」『朴玄燾全集』第4巻、図書出版へみる、2006年、466頁、468頁。

(22) * 金石範『火山島』第I巻、1983年、45-46頁。

〔米国は〕占領地を自国の経済に隷属させ、自分たちの市場をがっちり確保したんだよ。さらに日帝が残して行った工場などの莫大な財産をことごとく掌握し、その上ガリをピンハネして搾れるだけ搾ったあげく、それをまた反民族勢力に譲ってやった。米軍政は政治も経済もすべて意のままに再編成したんだ。⁽²³⁾

ただし、上にみられる祖国解放が幻影であったとの認識、解放者とみられていた米国がじつは日本の強力な後釜として朝鮮の政治経済を牛耳った支配者であったという認識が、朝鮮に一般化していた範囲については、見解が分かれうる。その後の韓国での親米イデオロギー浸透によってこれらの認識が忘却されたり修正されたりした可能性や、朴玄燾のいうような、朝鮮戦争後の米国の物資援助によって韓国民衆の幻影からの覚醒が遅れた可能性は、否定しえない。たとえば1980年に起こった光州民衆抗争においても、全羅南道庁にたてこもって抗争した学生たちは米国が自分たちを助けてくれると思っていた節があり、じっさいには米国がむしろ抗争を鎮圧する戒厳軍に協力するのを知って、のちに学生たちは米文化院に放火したり占拠したりする抗議行動に出た。その占拠時のピラや法廷陳述において、つぎのようなことが述べられた——米国は「戒厳軍の出動を事前に承認し、また軍事ファッショ体制を支援し支持している」云々、米国は「光州抗争を未然に防止し阻止すべきでした。ところがそうはせず、むしろ支援し幫助しました」云々、「韓国国民は、米国も光州虐殺にたいする責任を負うべきだと認識するにいたった。米国は韓国国民の深い疑惑を解くために真相を解明すべきであり、光州虐殺の支援について公開釈明をおこなわなければ、韓米関係は不幸な事態におよぶだろう」云々⁽²⁴⁾。ここには韓国の学生たちが米国にたいしていただいていた幻影が崩れたさいの失望と憤怒があらわれているようにみえる。

解放直後の朝鮮で一般化していた対米認識の把握は容易でないが、さしあたりここでは、米国をめぐる朝鮮人の状況認識が誤っており、そのことが、米国をはじめとする外国勢力や外部の冷戦体制が朝鮮半島に入りこむのを容易にしたであろうことを押さえておきたい。朝鮮民族が冷戦体制に編入されるのに対抗しうる朝鮮民族内の根拠が崩壊していたという喜喜⁽²⁵⁾の見解は、このことを指すであろう。

言論学者の康俊晩は、解放空間におけるさまざまな闘争は朝鮮人の植民地時代の過ごしかたと利害得失をめぐる争いであり、「既得権」と「免罪符」とがその核心をなすとみなしているようである。つまりイデオロギーは争いの過程で導入された装飾物の性格が強かった、というのである。たしかに親日派が既得権擁護のためにもっとも頼りにしたのが反共主義である⁽²⁵⁾。政治学者の崔章集も「社会の既得利益と保守勢力を結合させるには」反共イデオロギーが「きわめて効果的かつ容易であった」ことを指摘している⁽²⁶⁾。

政治イデオロギーとしては、「植民地下で累積された反帝反封建的革命的課題」やそこで主導的役割を果たしていた左派運動などの影響で、解放直後は「そうとう左傾化していた」朝鮮のイデオロギー地形が、数年のあいだに右傾化していったことを、政治学者の孫浩哲は指摘する⁽²⁷⁾。解放直後は、とりわけ生産手段の所有形態や経済体制にかんする議論に左傾状況がみられ、けっ

(23) * 趙廷來／尹學準監修『太白山脈』第V巻，392頁。

(24) 金よんてく『實録 5・18光州民衆抗争』創作時代社，1996年，282-289頁をみよ。

(25) * 尹健次『思想体験の交錯』岩波書店，2008年，49頁，89頁をみよ。

(26) * 崔章集／中村福治訳『韓国現代政治の条件』法政大学出版社，1999年，118頁をみよ。

(27) 以下，孫浩哲『現代韓国政治 理論・歴史・現実 1945～2011』イマジン，2011年，214-219頁をみよ。

して左派勢力とはいえない上海臨時政府の建国綱領ですら、生産機関・運輸事業・銀行・通信・交通機関や財産までも、大規模なものは国有化すると定めていた。ふつうは極右に分類される韓国民主党も、当時の政党関係のなかで極右とみられたにすぎず、その経済綱領の中身を一般的イデオロギー分類基準に照らしてみればむしろ左派に分類されるべきともいわれる。米軍政が1万人の朝鮮人にたいして「資本主義・社会主義・共産主義の体制のうち、どの体制がよいか」という輿論調査をおこなったところ、資本主義と答えた人が13%、社会主義と答えた人が70%、共産主義と答えた人が10%であったという結果も興味深い。このように当時は、いわゆる中道や右翼の支持基盤が脆弱で、政治状況が全体的に左傾していたのであり、これは〈左傾半分地形〉とよばれることがある。ところが分断によって事態は急変する。

それまで一部の右派勢力にかぎられていた反共思想を絶対多数の国民になんらかのかたちで同意させるまでに拡大し、反共分断意識を国民に内面化する決定的契機となったのが、朝鮮戦争である。分断および戦争によって〈左傾半分地形〉は〈右傾半分地形〉に変貌したのである。こののち1980年代中盤まで反共意識は、国家保安法・社会安全法などの法的統制をともなって再生産されてゆく。こうして反共思想は40年にわたり、資本主義発展の思想とならんで「根本的な疑問を呈しえない既成事実」の坐にありつづけたのである。

III イデオロギー形成の内的条件

つぎにイデオロギー形成の内的条件をみてみよう。これは朝鮮社会の現実的基礎がいかにして人々の意識のなかに染みわたり内面化していったか、いかにしてイデオロギーとして浸透していったかを探ることである。

外部の冷戦体制の波が解放後朝鮮に押し寄せたことは上述のとおりであるが、そこに住む人々が北の支持か南の支持か、共産陣営同調か自由陣営同調かという二者択一を迫られるにともない、冷戦の論理が尖鋭化し「大衆の意識のなかに一定の基盤をもつことになる」⁽²⁸⁾。いわば「解放から6・25動乱〔朝鮮戦争〕にいたる期間にもたらされた状況は、その正当性いかにかわりなく既成事実として受け入れられ、反共の名のもとに正当化される」⁽²⁹⁾のである。「冷戦論理と分断体制の正当化、その意識的日常生活が既成事実化される……すなわち、冷戦論理の民族内化、反共分断意識の内面化」がすすむのであり、社会科学もこの例外ではなかったといわれる⁽³⁰⁾。

解放空間および朝鮮戦争の経験をつうじて韓国社会に定着した極右共同体的状況を曹喜暉は〈反共規律社会〉と名づける。まさにイデオロギーをなした反共の論理が、他のあらゆる論理を圧倒し、人々を統制し規律化する条件がつくられたのである。朝鮮戦争によるイデオロギー的地ならしのうえに、1950年代には反共が全国民的同意基盤に拡大されてゆき、残留左派の人々が除去され疎外されてゆく。朝鮮戦争を機に内面化しはじめた反共分断意識が大衆のなかに一定の定着を果たしてゆき、反共は〈疑似国民的価値〉に拡大してゆくとともに、韓国には米国式自由民主主義的価値がいっそう深く移植された。韓国が政治的経済的側面のみならず知的精神的側面でも米国に近づいてゆく条件があたえられたのである。このような米国接近ないし親米イデオロ

(28) 曹喜暉『韓国の国家・民主主義・政治変動』90頁。

(29) 朴玄暉「分断時代韓国民族主義の課題」472頁。

(30) 以下、曹喜暉『韓国の国家・民主主義・政治変動』91-95頁をみよ。

ギーの浸透は、さきにふれた対米認識の修正を促した可能性があるだろう。

韓国民のなかに反共分断意識が「意思合意」つまり合意された意思として存在する状況が形づくられたのにもない、反共冷戦意識が一切の価値を超越するものとして認識されたと喜喜しい。「このような反共分断的価値は社会生活のなかで不断に確認され、社会生活をとおして絶え間なく再生産されており、大衆の内面において一種の自己検閲 (self-censoring) 機制として作用することになる」のである。喜喜しいのいう〈反共規律社会〉とはこのような社会のありかたを指している。

朝鮮半島分断は南半部において反共に直結し、さきの反共分断体制が形成される。〈分断〉と〈反共〉とは一体となって構造化するが、この〈分断〉〈反共〉の構造は韓国の人々にとってたんなる「外的現実ではなく内的現実に変化したものであり、それが大衆意識のなかに強力に基礎を固めている」といえる。すなわち、反共冷戦意識・冷戦論理・分断意識・反共・反共分断意識・反共的規律のごとき観念が、なんらかの機制をつうじて疑似国民的価値の地位につき、自己検閲をともしつつ全国民的同意基盤を得て「意思合意」として既成事実化されたと考えられる。これはイデオロギーの浸透とみなされるであろう。

このイデオロギーの浸透において、いかなる機制が作用したのか。社会学者の金東椿は、イデオロギーがたんに現実を隠蔽するために支配階級によって流布された虚構ないし欺瞞的論理であるとはみていない⁽³¹⁾。たしかにイデオロギーは第一次的には支配勢力によってつくられるだろうが、それは「特定の政治的力関係の反映であるので、一定のイデオロギー“地形 (terrain)”として存在する」のだから、支配勢力と対抗勢力との力関係のなかでイデオロギーが具体化される点を重視すべきだという。抵抗勢力のイデオロギーもこうした政治的力学の枠を抜け出せないことを見落としてはなるまい。

イデオロギーのなかでも「大衆の物質的生と関連したイデオロギー」すなわち生活上の要求に直結したイデオロギーは、その他のイデオロギーにくらべると、浸透力において大きく異なるとされる。また金東椿は、朝鮮現代史をみずから身をもって生きてきた世代にとって、その「体験」は「論理以前のもの」であり「譲歩できない、確信に近い信念」であろうことを指摘する⁽³²⁾。これは、人々の個別的体験の蓄積とイデオロギーとが結びついて固著することを示唆するものであろう。

さきにしるしたとおり、十月人民抗争、済州島四・三事件、麗水順天叛乱だけで数万人の人々が殺され、解放三年史はこれらの犠牲者の血によって色どられている。その後の朝鮮戦争は南北あわせて400万人もの犠牲者を生んだ。このような極限状況において、人々の意識のなかでいったいなにが起こったのだろうか。小さな村落に住む読み書きもままならない数多くの人々にとって、政治や主義主張がどこまで意味をなしたであろうか。朝鮮戦争が始まると、米国に後押しされた韓国軍(国軍、連合軍)と、のちに中国に後押しされることになる人民軍(共産ゲリラ、パルチザン)とが、朝鮮半島のあちこちの村落を競って支配下におさめていった。村が韓国軍の天下となり人民軍の家族や人民軍に協力した村人が処断されたかと思えば、あくる日には人民軍が韓国軍を駆逐し韓国軍にとらえられていた村人を解放して逆に韓国軍協力者や警察関係者を処断するという出来事がしばしば起こった。村にやってきた韓国軍を人民軍と勘違いして人民旗を掲げて

(31) 以下、金東椿『分断と韓国社会』歴史批評社、1997年、23-25頁をみよ。

(32) 金東椿『韓国社会科学のあらたな模索』創作と批評社、1997年、79-80頁をみよ。

殺されてしまった村人もあった。「昼は大韓民国、夜は朝鮮民主主義人民共和国」という当時の言葉は、朝鮮半島の村落におよんだふたつの支配勢力がめまぐるしく替わった状況を象徴している。「昼は大韓民国、夜は朝鮮民主主義人民共和国」のありさまが悲惨なかたちで表現されたのが、韓国軍によって719人の住民が集団殺害された居昌良民虐殺であった。

村落の住民にとってみずからの政治的立場を沈思したりイデオロギーを云々したりする余力はなく、ただ「命を保つために、こちらに付いたり、あちらに付いたりして、ひっそりと命をながらえて生きのびるしかなかった」⁽³³⁾。いうなれば「どんなやり方でも順応することだけが命をまともに保存することの出来る道であったし、そういう、権力行使に対する沈黙と従順が確実な生き残りのための戦略の一つとして受容されざるをえない時代だった」⁽³⁴⁾のである。大半の民衆は「自分の生命維持をはかるのに汲々としていた」のであり「生存の論理を内面化」していたのである⁽³⁵⁾。こうして形成された反共の精神風土は「思想的由来のない極右的政治地形」⁽³⁶⁾ともよばれる。

生存の論理や反共イデオロギーの「内面化」は、これらにたいする「同意」とみなされることがあるが、反共イデオロギーにたいする民衆の「同意」を「能動的同意」とみなすか「受動的同意」とみなすかという論点について、孫浩哲はつぎのように理解する。「能動的同意」とは「暴力的圧迫ではない完全なイデオロギー的浸透による」同意であり、このことは「一般国民の“自発的”共産主義者申告を証拠として」判定される。他方「そのような同意を戦争の理念にたいする被害意識・恐怖意識にもとづく防禦的で受動的な」同意とみなしうる場合、すなわち「国家の暴力的圧迫にたいする被害意識にもとづく」同意は、「受動的同意」と呼ばれる⁽³⁷⁾。ただし能動的同意・受動的同意については、なお細かな研究が必要であることを孫浩哲は書き添えている。

被害意識や恐怖意識にもとづく防禦的で受動的な同意は、つぎのように形を変えて凝縮することがありうる。

精神は目に見えますか。思想は目に見えますか。それらは僕たちの意識の中にのみあるものなのです。では「恨」とは何でしょう。それは……怒りと悔しさと怨恨が積みもり積もった感情でしょう。それはほかでもない、抑圧され搾取されて生きてきた人々の体験と精神の凝縮なのです。言い換えれば、支配されてきた者同士にのみ通じる思想なのです。ただ、それが政治的なイデオロギーと違う点は、体験的な思想の凝縮であって、分析的な理論化や実践的な論理化ができなかったという点です。⁽³⁸⁾

同意という言葉とは異なるが、戦争の〈イデオロギー的教化作用〉は崔章集によっても論じられている。すなわち「朝鮮戦争が韓国社会に与えたもっとも大きな結果は、国民の心性に及ぼした衝撃である」とみられ、この衝撃は戦争の残酷なさまを個々人に知らしめる「直接的な経験」

(33) * 金源一／尹學準訳『冬の谷間』93頁。

(34) * 文京洙『済州島現代史』新幹社、2005年、74頁。

(35) * 金東椿『近代のかけ』122頁、124頁をみよ。

(36) 姜禎求『現代韓国社会の理解と展望』はぬる、2000年、231頁。

(37) 孫浩哲『現代韓国政治 理論・歴史・現実 1945～2011』217頁、221頁をみよ。

(38) * 趙廷來『太白山脈』第7巻、2000年、307頁。

なお〈恨〉については、* 拙著『韓国社会意識粗描』第7章をみよ。

であり、その経験をつうじて人々の心の底に「共産主義を憎悪する意識」が植えつけられる。この経験は国民全体に「順応的心性を植えつけるイデオロギー的教化作用」を発揮し、そのうえで国家エリートは「ほぼ無制限の強権を行使できる正当性」を手中におさめたのである。こうして「反共イデオロギーが正当性を獲得する」にいたる⁽³⁹⁾。

朝鮮戦争は「支配構造の恒久的連続性を強化させてきて、政治、経済、社会、イデオロギーの諸レベルにおいて制度化・内面化しながら、冷戦体制が強制した相互憎悪の生の存在様式を形成・維持してきた」のであり、そこで形成され民衆に流布されたイデオロギーはきわめて幅が狭く「型にはめられた」ものでしかなかった⁽⁴⁰⁾。これは先にみた、観念を構造化し「他の人間と共通した思考形式」をつくりだす型として把握されるイデオロギーの典型ともいえる。

朝鮮戦争が韓国の国家や政治におよぼした最大の影響はイデオロギー地形を変化させたことであるとみなされる。変化した地形のもとでイデオロギーが自立して爾後の政治的方向を根本的に条件づけたのであるが、じつは韓国の国家や政治とイデオロギー地形の変化とのあいだには相互関係がある。「イデオロギー地形が国家の性格規定に構造的制約を加え、また逆に、国家の性格がイデオロギー地形の維持・変化に重要な影響をあたえる」のである⁽⁴¹⁾。

戦争における衝撃や直接的経験のほかに、平時においても民衆は恐怖と抑圧を経験した。分断は、国家保安法という抑圧的安保機構と軍部の膨張を生みだし、それらによる抑圧と暴力の恐怖は「市民の日常的な生を窒息させるかのように締めつける力」を発揮した。反共分断軍事体制下の抑圧と弾圧のなかを生き延びた韓国民衆の経験もまた「順応的心性を植えつけるイデオロギー的教化作用」を有したことは想像に難くない⁽⁴²⁾。

このような「国家の暴力的圧迫」や戦争の残酷なさまの「直接的な経験」によって「イデオロギー的教化」がはかられたことは同時に、支配階層がみずからの道徳的指導力をつうじて民衆の「理念的支持」ないし「道徳的支持」を得るのが困難であったことを反証するものである。それはつまり反共分断国家が正当性の危機を内蔵していたことを示すものでもあったといえる⁽⁴³⁾。

こうして解放後にとうぜん生ずるであろう多様な立場が存立しえなくなり、それらの立場は共産主義陣営か資本主義陣営か、より正確にいえば親ソか親米かという二勢力の対立に収斂させられる。これは先のイデオロギーの狭さを示す現象であろう。

IV 思想的由来なきイデオロギー

なんらかの思想、世界観、価値意識、政治的立場などは、人々の「物質的生」すなわち生活上の要求という土台のうえに獲得されるが、それらを内面化するさい、すなわちそれらに「同意」するさい、その同意が「暴力的圧迫ではない完全なイデオロギー的浸透による」同意であるか、「戦争の理念にたいする被害意識・恐怖意識にもとづく防禦的で受動的な」同意、つまり「国家の暴力的圧迫にたいする被害意識にもとづく」同意であるかによって、同意は能動的同意と受動的同意とに区別できると孫浩哲は論ずる。能動的同意は、当人が心身に圧迫を受けることなく、

(39) * 崔章集『韓国現代政治の条件』11頁をみよ。

(40) * 崔章集／中村福治訳『現代韓国の政治変動』木鐸社、1997年、16頁、29頁、146頁をみよ。

(41) 孫浩哲『現代韓国政治 理論・歴史・現実 1945～2011』214頁をみよ。

(42) * 崔章集『韓国現代政治の条件』148頁をみよ。

(43) * 崔章集『韓国現代政治の条件』118頁をみよ。

理念や道徳や思想を知的ないし理性的に理解し、論理的に同調し共鳴することである。受動的同意は、当人が心身に圧迫を受けて、理念や道徳や思想と関係のないところで、事柄を身体的感性的に受けとめ、その事柄に抵触する立場を排除することである。つまり能動的同意はまさしく〈positiv〉すなわち肯定的・積極的であり、受動的同意は〈negativ〉すなわち否定的・消極的なのである。

朝鮮においてとりわけ問われるのは後者の受動的同意であろう。受動的同意は、「直接的な経験」として身をもって味わった「衝撃」や、「市民の日常的な生を窒息させるかのように締めつける力」のごとき「暴力的圧迫」によって成り立つ。このような衝撃や圧迫を朝鮮民族はじっさいに受けてきたのであり、その衝撃や圧迫の極北が朝鮮戦争であった。朝鮮戦争に象徴される「体験」は、「論理以前のもの」「譲歩できない、確信に近い信念」として、あるいは「生存の論理」として、人々の心中深く固著し、人々に有無をいわずに「順応の心性を植えつける」ものであった。人々がものを考え、世界観を形成する間をあたえず、事態が「既成事実」と化し、親米反共の世相がつくられた。「思想的由来のない極右的政治地形」という姜禎求の言葉にみられる「思想的由来のない」ありさまとは、まさしく能動的同意の欠如を意味している。つまり受動的同意によって解放後朝鮮社会の基盤がつくられていったのである。

反共はこうして韓国のなかに染みわたり固まってゆくが、それは歴史的経緯のなかで必然的に朝鮮半島分断を含意し、曹喜暗のいう反共分断意識へと移行する。反共分断意識は、冷戦の論理・陣営の論理にもとづいて形成されたもので、北側との対決をおおる効果を発揮する。李承晩政権はまさにこの陣営の論理に立脚して分断を煽ったといえる⁽⁴⁴⁾。

反共分断意識の内面化やその大衆のなかへの定著をとおして〈反共規律社会〉が形成されることは「反共分断意識の過剰社会化 (oversocialization)」⁽⁴⁵⁾ともよばれる。この言葉は「過大成長国家 (overdeveloped state)」という概念を連想させる。過大成長国家とは「植民統治によって帝国主義国家の発達した国家機構が植民地社会に移植された結果、独立後も、経済的土台や社会的基盤より、過度に強い国家が支配的な役割を果たすようになったことを意味する」⁽⁴⁶⁾概念である。過大成長国家が国民のなかに反共分断意識ないし反共イデオロギーを過剰に浸透させ、これを過剰に「社会化」したことは、みやすい道理であろう。

分断意識は朝鮮半島を半分に分断して国家を営む意識であり、残り半分の国家を敵対視する意識である。当然この半分に分断された国家は全朝鮮民族の主権国家とは齟齬を来たすし、分断は全朝鮮民族の主権国家設立を阻むものである。このような民族分断の主張がときとして民族主義の名のもとに喧伝されるなど⁽⁴⁷⁾、韓国においては民族主義が多様な意味あいでも語られてきたが、ほんらい民族主義は民族の統一および統一民族国家樹立をめざすものであろう。つまり民族主義は民族分断に真っ向から対立する思想であらねばならない。民族分断の肯定は、南だけの現国家、北だけの現国家をおのおのが正当化し、相手側の国家をみとめない立場で、これは国家主義といえる。ナショナリズムという片仮名語が日本で民族主義とも国家主義とも受けとめられるのと異なり、朝鮮半島においては、民族主義と国家主義とがするどく対立する。李承晩以来の韓国歴代

(44) 徐仲錫「李承晩大統領の反日運動と韓国民族主義」成均館大学校人文科学研究所『人文科学』第30集、2000年、318-320頁をみよ。

(45) 曹喜暗『韓国の国家・民主主義・政治変動』94頁。

(46) 崔章集『民主化以後の民主主義』45頁、さらに*崔章集『韓国現代政治の条件』7-8頁をもみよ。

(47) *拙著『抵抗の韓国社会思想』青木書店、2010年、第三章をみよ。

独裁政権は国家主義の立場を堅持し、北の政権を徹頭徹尾批判し否認してきた。韓国でいわれる国家主義は、南の政権の正当性、北の政権の不当性を鞏固に主張し、南の国民統合を強化するものであった。反共はその基礎であった。

けれども解放後の朝鮮民衆にとって反共も陣営の論理も説得力のある理念ではなかった。李承晩以来の韓国大統領は国民統合のために、あるいは政権の正統性確保のために、反共や陣営の論理のほかに民衆を惹きつける理念を立てなければならなかった。まず李承晩政権が喧伝したのは「反日」の理念であった。

植民地支配は、解放時の韓国民衆のだれもが身をもって経験しており、「反日」は、だれもが皮膚感覚で直観的に納得し同意する理念であった。韓国民の支持率の高いこの理念を政権の立場として掲げ、政権の基盤を固めたのが李承晩政権であった。李承晩政権下で「反日感情がよく鼓吹されたのは、植民地体験にもとづいた敵を民族社会の外側に設定することをもって、抑圧的支配秩序の正統性構築において反共理念がもつ限界を補完しようとしたためである」⁽⁴⁸⁾というべきであろう。ただし、李承晩政権は表面上「反日」を掲げていたものの、政権の実態は親日的であった。すなわち、植民地日本の警察をはじめ親日官僚らを優遇し登用していた米軍政⁽⁴⁹⁾の後継たる李承晩政権は、親日官僚によって行政の基盤を固めるとともに、政治的立場としては陣営の論理にもとづいて反共の旗幟を鮮明にした。そして親日派とは「解放後は反共『民族主義者』にすりかわり、李承晩政権の中樞を占めた」⁽⁵⁰⁾人々なのであった。親日派は解放後にみずからの親日経歴を「反共」「滅共」にすりかえることによって生き延び、それどころか「政府内の親日派粛清、この当りまえのことが実現すれば現政権が崩壊することになる」といわれるほど親日派は李承晩政権の根幹にくいこみ、政権の土台をなしていたのである⁽⁵¹⁾。「反日」の理念は、建前として、口実として、掲げられたにすぎない。むしろ、李承晩政権は親日派を根幹に据えていたからこそ、政権は国民に向かってことさらに「反日」を掲げたともいえる。

反日は反共を補強する性格をもっていた。感覚的に受け入れられやすい反日と、説得力に限界のある反共とが抱き合わせでかきたてられ、それらがおもに感情的に煽られたところに留意しなければならないであろう。

李承晩政権後に長期政権を築いたのが朴正熙であった。朴正熙政権も自明の理念として反共をひきつのだが、このほかに朴正熙政権が前面に出したもうひとつの喧伝材料が、発展、すなわち経済発展・経済成長であった。朴正熙大統領みずから歌にのせて流布した「よい暮らしをしてみよう」という掛け声や、農村近代化運動であるセマウル運動は、朴正熙政権の発展指向・成長指向を象徴するものといえる。他方で朴正熙政権は、断固たる反共政策を堅持し、反政府人士や民主化運動家にたいしては強圧的な姿勢で臨んだ。経済成長をはかり国民の経済的水準を向上させる代わりに、政府の方針に口を出すなどいわんばかりの抑圧的権威主義体制をしき、相異なる二重の態度で国民統合をはかった。朴正熙政権においては政治的な反共と経済的な発展とが既成事実化し、だれにも抗いがたい〈疑似国民的価値〉の坐を占めるにいたるのである。そして政治的的反共と経済的発展とを取り結ぶのが、国家にたいする忠誠、すなわち国家主義である。反共も発

(48) 車基壁『民族主義原論』はんぎる社、1990年、333頁。

(49) 金仁杰ほか『韓国現代史講義』とるべげ、1998年、33-34頁をみよ。

(50) *姜徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997年、389-390頁。

(51) *金石範『火山島』第Ⅶ巻、文藝春秋、1997年、423頁、428頁をみよ。

展も、つまり政治も経済も、国家権力のもとに束ねられる。逆にいえば、政治と経済とが国家にとって不可欠であるように、反共と発展とは国家主義にとって車の両輪をなすのである。

解放直後から一変して「右傾半分」と化したイデオロギー地形は、1980年代中盤にいたるまでの長きにわたり、国家保安法・社会安全法などの法的統制機制とイデオロギー国家機構によって反共イデオロギーとして再生産され、この反共イデオロギーによって「右傾半分」イデオロギー地形は維持され再生産されていったというのが韓国の現実である⁽⁵²⁾と孫浩哲はいう。そのさい、反共イデオロギーに発展イデオロギーが親和的に作用してこれを助長した経緯にも眼を向けるべきであろう。

政治・経済という社会構成の二局面にわたる国家主義は、反共の観念によって国民を統制し、発展の観念によって国民を鼓舞する。陣営の論理である反共が北側に対抗する観念であるのと同様に、発展もまた北側への対抗意識をともなって掲げられた目標である。この意味で、高度成長をとげたとともに親米反共の砦となった韓国は、いぜん分断という現実に規定された社会であり、曹喜昶が名づけた〈反共規律社会〉という性格はいまなお韓国の基底にひそむものといわなければならない。

結びにかえて

解放後朝鮮、とりわけ南半部=韓国のイデオロギー形成の概観をこころみたが、これをたんなる歴史的事象として把握して事足りるとすべきではないだろう。歴史社会学的研究蓄積のある金東椿は「社会的現実とは行為者の実践的活動の結果として獲得された現実認識にもとづいて再生産されるものであるため、過去の体験は、それがどれほど強力なものだとしても、今日の現実のなかで検証され再解釈されえなければ、けっきょく個別的経験の枠内にとどまらざるをえず、〔その体験は〕分断固著と権力構造の再編のなかで南韓社会の既得権を享有している“体験”だという非難を免れがたくなる」と論じ、みずからも「過去の事実そのもの」や「すでに政治的意味を喪失している過去の事実」を探るのではなく「直面する現実にたいして批判的に問題提起し分析する」ことを課題としている旨を述べている⁽⁵³⁾。過去の出来事や過去の経緯のうえに現在の社会が築かれているのであり、現在の社会を把握するさいには過去の経緯を的確に把握するとともに、過去の経緯が現在の社会にあたえている影響や作用を分析することがもとめられるのだが、焦点はあくまで現在の社会、「直面する現実」にあてられるべきであることを金東椿は主張するのである。本稿でとりあげたイデオロギーの防禦的受動的同意過程、疑似国民的価値の存否や成立根拠、大衆の物質的生、生存の論理、論理以前の順応的心性、思想的由来のないイデオロギー地形などを、今日の韓国社会の構成要素として論じてゆくべきであろう。

*本稿を、小田清先生・高原一隆先生にささげる。

(52) 孫浩哲『現代韓国政治 理論・歴史・現実 1945～2011』219頁をみよ。

(53) 金東椿『韓国社会科学のあらたな模索』80頁、金東椿『近代のかけ』374頁をみよ。